

# 省力・多収生産を目指した促成ニガウリ栽培



写真1 「収穫枝連続更新」整枝法での栽培



写真2 ミツバチによる受粉の様子

ニガウリは冬春期に高単価で販売される有望品目です。当センターでは、これまで促成栽培での省力・多収生産技術の開発に取り組み、品種‘えらぶ’を用いて「収穫枝連続更新」法により整枝することで目標とする収量を得ることができました(第53号)。ここでは、夜温管理および交配方法について検討を行いましたので紹介します。

夜温は、平均18、平均16 の2処理で検討しました。その結果、上品収量は平均18

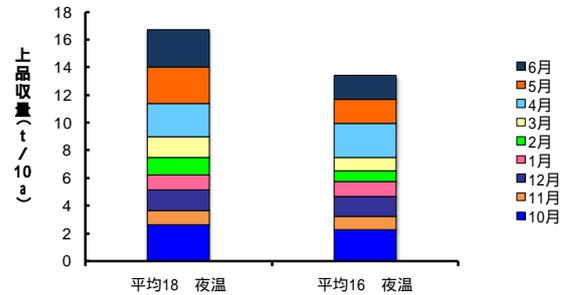


図1 夜温および品種の違いと月別上品収量

品種：‘えらぶ’，夜温管理：平均18 夜温；20 -18 -16 の変温管理，平均16 夜温；18 -16 -14 の変温管理，播種：2008年8月15日，定植：9月3日，栽培方法：うね幅135cm，株間67cm(1,105株/10a)，仕立て・整枝方法：1本仕立て・収穫枝連続更新，交配方法：ミツバチ+人工交配，栽培終了：2009年6月30日

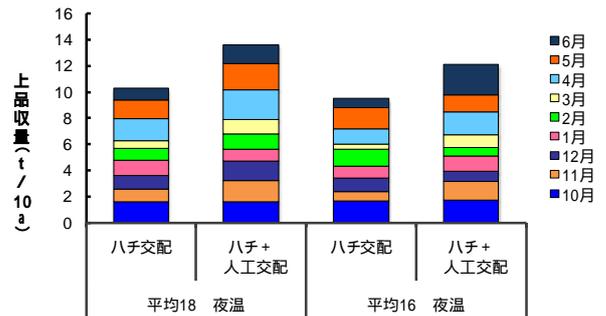


図2 夜温および交配方法の違いと月別上品収量

品種：‘えらぶ’，交配方法：両区ともミツバチ放飼ハウスに設置。収穫枝1本当たり6花交配(正常雌花のみ交配を行い、その他の雌花は全て摘除)を基準とし、交配後に摘心。ミツバチ+人工交配はミツバチ交配の有無にかかわらず、毎日人工交配。以下、耕種概要は図1と同じとした。

で約17 t /10a得られました(図1)。

次に、ミツバチ交配およびミツバチ+人工交配について比較したところ、ミツバチ交配だけではいずれの夜温でも収穫果(可販果)率の低下がみられ、上品収量で20%程度減少しました(図2)。

今後は、ミツバチ交配において可販果率を高める管理技術、さらに省力化につながる整枝管理について検討を行う予定です。(施設野菜担当 橋田祐二 088-863-4918)